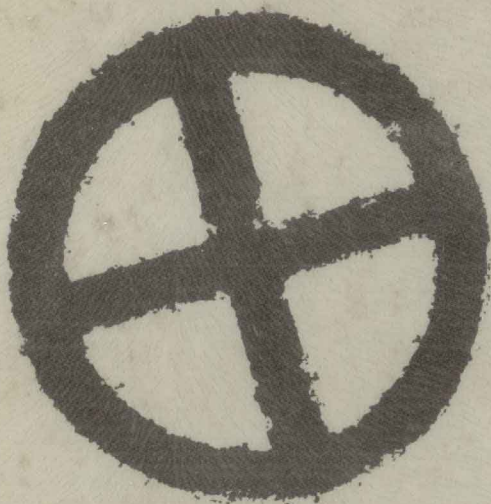
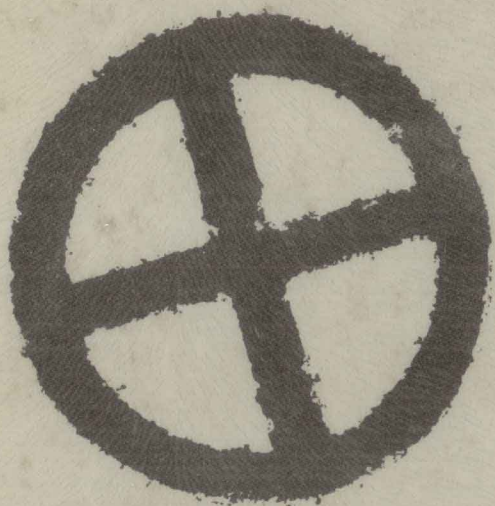




西郷隆盛 第二卷

落花の巻

書名	著者	定価	発行所	発行者	発行日	印刷所	製本所	製函所
西郷隆盛 落花の巻	林 房雄	三八〇円	徳間書店 東京都港区新橋四の一〇	徳間康快	昭和三十九年六月五日 初刷 昭和三十九年十二月二十日 三刷 ✓	図書印刷株式会社	大口製本印刷株式会社	文京紙器株式会社

乱丁、落丁ありましたらおとりかえいたします

林 房雄 ©

林房雄

西郷隆盛

第二卷 落花の巻

西
鄉
隆
盛
／
目
次

落花の巻 * * * * * 目次

第一章 刺客行 * * * * * 9

第二章 江戸の秋 * * * * * 25

第三章 白雪 * * * * * 56

第四章 旋風 * * * * * 72

第五章 花散りぬ * * * * * 94

第六章 煙り雨 * * * * * 105

第七章 境い木 * * * * * 115

第八章 流人船 * * * * * 139

第九章 新樹 * * * * * 153

第十章 冬日の影 * * * * * 175

第十一章 春還る * * * * * 197

第十二章 初入部 * * * * * 207

年表 * * * * * 222

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人

落
花
の
巻

第一章 刺客行

それから、十日ほどすぎた八月五日の夜。竹内伴右衛門の姿は、ふたたび村野伝之丞の屋敷にあらわれた。

主人の伝之丞が自ら玄関まで出て来て、

「これは、ようこそ。——おひとりか？」

「はい、白尾伝右衛門が所用のためおくれましたので、あとで岩崎専吉が同道してまいることになっております」

「いろいろお骨折りがとう。——さあ、どうぞ、さつきから皆様お待ちかねだ」

奥の書院には酒肴の用意がととのっており、三人の先客が待っていた。町奉行近藤隆左衛門、鉄砲奉行山田一郎左衛門、船奉行高崎五郎右衛門——いずれも正義党の中心人物と見なされている人々である。

竹内は末席にかしこまって、うやうやしく頭をさげた。

「高崎殿はじめてでございましたな」白髪頭の品のいい山田一郎左衛門が物なれた調子で引きあわせた。「かねて、お話の竹内殿です。国学に通じ、蘭学にもくわしく、特に国学においては、平田篤胤

大人生前の門人で、その点では、私などより先輩です」

「おそれいます」竹内は赤くなつて頭をかきながら、

「そのように仰せられては、申上げる言葉もございません。ごらんのとおりの田舎者です。どうぞ、よろしく」

「田舎者はお互い様」高崎五郎右衛門は長者らしく鷹揚に微笑して、「さあ、ずっとこちらに……このたびはいろいろとお骨折り。……お近づきのしるしに、一献ささせていただくかうか」

「ありがとうございます」

酒宴になったが、座は浮き立たなかった。それぞれ胸にしこるものがある様子で、ふくむ盃の味も苦そうに見える。

「竹内殿は、江戸にはいつごろ？」

近藤隆左衛門がたずねる。

「はあ、最初が十八歳の頃ですから、天保五年ですか。……二十一歳のときに再遊して、平田大人の門に入りました」

「では、江戸の様子にはだいぶおくわしいわけですね」

「はあ、いくらか。……しかし、もう七、八年前のことになりますし……」

「牧仲太郎とはいつ頃からのお知合いで？」

「彼も実は平田塾に顔を出していたことがあるのです」

「ほう、これは初耳！……あの奸物とあなたが同門だとは」

「同門であるから、なおさら、彼を憎まざるを得ないのです。平田先生は決して妖術を用いて主君を呪^{のろ}いなどとは教えなかった」

「いかにも！」

「昔の牧仲太郎は好学の青年で、私は敬意をもって親しくつきあっていたのですが、……このような大それた奸物になろうとは思いませんでした」

「あ、来たらしい」

主人の村野伝之丞が廊下をふりかえった。

取次ぎの侍が手をついて、

「岩崎、白尾の両氏が玄関に見えております」

案内されて来た二人は、どちらも三十四、五、粗末な帷子^{かたびら}をつけ、いかにも武骨な田舎侍に見えた。先客の三人が、藩の高名な重役たちであることを知ると、非常におどろいたらしく、末座の方にかしこまって、しばらく頭をあげようとしなかった。

竹内は、背の高い方を岩崎専吉、小柄な方を白尾伝右衛門と紹介して、

「二人とも、子供の時から親友で、永年の同志であります。岩崎は直心影流免許皆伝^{めんぎょいかいでん}の腕前、加治木第一の武芸者であります。……昨年来、江戸にあって、島田虎之助の門に学び、最近帰って来たばかりであります。……白尾もまた、剣道においては岩崎に劣らず、かつ、洋式砲術にも深く達しております」

「おい、竹内、あまり言葉が大きすぎる」

「そんなにいわれると、どうも、われわれは……」

二人は顔を見合せて、若者のようにはにかむ。

「いやいや、謙遜には及ばぬ」山田一郎左衛門が引きとって、「諸君のことは、和田仁十郎からもかねがね噂に聞いて、ぜひ一度おあいしたいと思っていました」

二人分の酒肴が新たに運ばれた。

「さあ、遠慮なく……もつとくつろいで……」近藤隆左衛門がいった。「和田仁十郎のことについては、まことにいろいろと世話になった。われわれからもお礼を申す」

「いえ、べつに何も……」

「いやいや、赤山靱負殿からうけたまわったが、和田が加治木の岩屋寺で修法中は、両君から金穀^{きんこく}まで恵んでいただいたとのこと……」

「あ、それは……」

岩崎と白尾は、顔色を動かして、竹内の方を見た。どこまで話していいのかと問いたげな不安な面^{おもて}持である。

「心配は無用！」竹内はとりなした。「ここへお集りの方々は、……いや、説明は無用だ。先夜の赤山靱負様と同様、万事腹藏なく話してくれ」

「心配しているわけではないが……」と、岩崎専吉はやや不服そうに、「君が何もいってくれなかったので、先夜と同様、赤山様と村野様ばかりと思ってやって来たのだ。なあ、白尾」

「ああ、お三方がそろっておられようとは思いがけなかった」

「いや、三人お集りになったのは偶然です」村野伝之丞が説明した。「だが、ちょうどいい機会だと思つて、お三人にお待ちしていただいたのです」

「岩崎、白尾の御両所。どうぞ、そのように固くならず、聞いていただきたい」今まで、黙々と盃をふくんでいた高崎五郎右衛門が膝を乗り出して、「若殿の御為を思い、薩摩の将来を憂うる点において、われわれの心は一つです。身分や役柄にこだわらず同志として話をしよう。……和田仁十郎に命じて、武運長久の修法をさせたのは、実はわれわれです。その和田の修法を、諸君が苦しい暮しの中から金穀まで割^きいて助けてくれたと聞いたときには嬉しさに涙がこぼれた」

「……………」

「われわれは諸君の名前も顔も知らぬ。諸君もまたわれわれを知らぬ。知らぬ者が知らぬ者を助けてくれるのは、志が一つなればこそだ。……加治木は同藩とはいえ、鹿児島の下からは独立して、いわば垣根の向うの隣り国だ。その隣り国にまで、われわれの志を助けてくれる誠忠の士がいることを知った時の喜びを察していただきたい」

庭の植込みの中で、夜の蟬がジイと鳴いた。

二人は崩さぬ膝の上に両手をおいて、黙々と聞いている。その固苦しい姿に山田一郎左衛門が気がついて、

「高崎殿、盃をおまわしになったら」

「いや、お盃はあとで……」形をくずさずに、岩崎専吉は答えた。「どうぞ、お話をつづけて下さい」「われわれは諸君のことを和田仁十郎から聞き、すぐにも諸君におあいしたいと思った。だが、御存

じのとおり、若殿の武運長久を祈ることさえ、それを喜ばぬ一派がわが藩には深く根を張り、勢いをふるっている。……そのために、まず村野殿と竹内殿にあつていただき、……今夜はじめてわれわれ三名が諸君とおあいするという迂遠な方法をとらざるを得なかった」

「……………」

「何に對して、このように遠慮するのかとわが身を叱りたい気がするが、御存じのとおり、蛸は死んだが海老は死なず、醜類奸物の余類が奸女お由良をめぐつてふたたび勢いを盛りかえして來た現在では、ほかに方法もない。まことに腑甲斐ない次第であるが……」

話すうちに昂奮して、高崎五郎右衛門の肩はぶるぶるとふるえはじめた。この船奉行もまた、齡とともに感情が單純化されて、怒れば自分を制御できなくなる慷慨家の一人らしい。

「現に、調所笑左衛門の息子左門は、お役御免、屋敷取上げの嚴罰に処せられながら、稻富數馬と名を変えて、物頭ものがしらという大役に拔擢へつてきされている。奸女お由良の推挙がなかったら、このようなことになるはずはない。……若殿様よりのお手紙にもはつきりそう書いてある」

「高崎殿！ それは……」

山田一郎左衛門が側から注意したが、高崎は頑固に首をふつて、

「いやいや、ここまでいったら、何もかくすことはいらぬ。信には信をもつて對せよ。……竹内、岩崎、白尾の三君、私は今夜、同志として、諸君にすべてを打ちあける。どうぞ、聞いてもらいたい」

高崎五郎右衛門の昂奮が尋常でないので、座はしんとなった。高崎自身も、その沈黙に氣押けおされて、黙りこむ。一同の膳の上の盃は、さつきから冷えるがままにされていた。

やがて、沈黙を破ったのは、近藤隆左衛門であつた。

「高崎殿、お続け下さい！」大きな声である。齡は山田、高崎の両奉行よりはるかに若く、かねて一徹な激情家としておっている人だ。「われわれの間では何もかくすことはない。かくすのは敵に對してのみです！」

「ああ、いや、年甲斐もなく大きな声を出しました」高崎は額の汗をふきながら、「諸君をこの席にお招きしたのは、ほかでもない。……赤山殿のお話では、諸君は近く江戸に上る御予定だと聞いたが……事実でありましょうな」

緊張の色が三人の顔に流れた。互いに顔を見合せたまま、答えようとしなない。

岩崎専吉は、武芸者らしい肩を怒らせて、竹内伴右衛門の顔をにらみながら、

「おい、お前から御返事申上げろ。……それとも、われわれの上京の目的を、お前はもう打ちあけたのか？」

「いや、君たちと一緒に赤山様にお話したこと以外には何も申上げたおぼえはない」竹内は弁解して、高崎の方に向き、「われわれ三人が江戸に上ることを寄り寄り相談していることは事実でございます」

高崎は氣ぜわしくたたみかけて、

「出発の時期はいつに決められた？」

「それは……まだ、決っておりません」

「今すぐに……今日明日のうちに出發するというわけにはまいらぬか？」

「御用件を先にうけたまわりたいと思います」竹内がいった。「その点は、私もまだお聞きしていませ